

# NEWSLETTER #106

## 地区例会報告

- p.1 2015 第2回関西地区例会.....福永健一  
p.2 2015 第3回関西地区例会.....肥山紗智子・永井純一

## Information

- p.4 事務局より

## 2015 第2回関西地区例会 福永健一

**研究会：「日本のポピュラー音楽のアーカイブ、展示の現状および研究への活用について」**

**日時：2015年9月4日（金）18:00-20:00**

**於：関西大学千里山キャンパス第3学舎C404教室**

**報告者：**

**柴台弘毅（関西大学）三浦文夫（関西大学）**

**ゲスト：**

**山中聡（元音制連副理事長）**

**司会：**

**太田健二（四天王寺大学）粟谷佳司（立命館大学）**

2015年9月4日（金）、関西大学千里山キャンパスにおいて、第2回関西地区例会が開催された。

今回の例会は、研究会「日本のポピュラー音楽のアーカイブ、展示の現状および研究への活用について」と題された。趣旨は、関西大学日本ポピュラー音楽アーカイブ・ミュージアムプロジェクト（以下、PMAM）および、一般社団法人音楽制作者連盟の MOMM（Museum Of Modern Music）の取り組みの報告である。PMAM と MOMM は、日本のポピュラー音楽を体系的に整

理し、散逸しつつある映像、音源、ドキュメントのアーカイブ構築のための活動に取り組んでいる。報告者は、柴台弘毅氏（関西大学）、三浦文夫氏（関西大学）、そして山中聡氏（音制連副理事長）の3名である。

まず、柴台氏から PMAM の現状について、目的、取り組み、収蔵資料の内容、課題等について報告がなされた。PMAM は、1960 年代から現在まで日本のポピュラー音楽を体系的に整理し、文書、画像、音源、映像資料によるアーカイブ構築をめざすものである。特に、映像資料（テレビ出演、ミュージックビデオ、コンサート映像など）を中心に収集しており、2015 年度までに 6000 本の保存を目指しているとのことであった。また、収蔵資料の内容紹介として、すでに保存された映像資料がおおよそ 20 分間上映された。本取り組みの課題として、人手不足、運営資金の調達を挙げられた。特に、映像資料である記録メディアの劣化が進行しているため、早急なアーカイブ化が求められることが強調された。

次に、三浦氏から PMAM の音楽映像資料等のアーカイブ化について、著作権等といった権利関係の問題を中心に報告がなされた。氏によれば、音楽映像はすべてが保全されているとは言いがたく、むしろ失われつつあるという。音楽映像は貴重な文化遺産であり、研

究、教育、ビジネス、ドキュメンタリー等の素材としてのニーズが強く見込まれる。しかし、そのデジタル化・アーカイブ化の権利処理は非常に複雑であるという。映像作品には、著作権や肖像権、パブリシティ権などあらゆる権利が発生するためである。そこで、構想段階であるが、そうした諸権利問題をクリアできる「著作権制限特区」でのプロジェクト展開案について紹介がなされた。

最後に、山中氏から、MOMM の現状およびアーカイブされた資料の活用事例として、氏が総合プロデューサーを務めた展示会「'70s バイブレーション！」の企画意図、展示内容などの詳細について、「'70s バイブレーション！」のホームページを参照しながら解説がなされた。一例として、70年代に活動していたミュージシャン、プロデューサー、レコード店のオーナーなど、当時の音楽を取り巻く人々のトークイベントを通してオーラルヒストリーを束ねていく、といった取り組みが紹介された。

フロアからは、アーカイブ化する際の資料選定の範囲や基準について質問がなされた。三浦氏によれば、範囲は基本的に日本音楽制作者連盟に所属するアーティストが中心だが、資料収集の方法として、放送局が保存している映像をすべて保存するという形態をとっているため現段階では雑多である、とのことであった。また、基準については、すべてのアーティストではなく、重要かつ結節点となるアーティストを中心に置きたいが、現段階では収集可能なものはすべて収集しているという。そのため、今後、研究会で選定基準等について活発に議論を行いたい、とのことであった。PMAM は現状発展段階とのことである。プロジェクトの発展にしたがって研究会を開催し、ふたたび活発な議論が交わされることを期待したい。

(福永健一 関西大学社会学研究科)

## 2015 第 3 回関西地区例会(特別例会) 肥山紗智子・永井純一

日本音楽学会西日本支部第 28 回 (通算 379 回) 例会  
と合同例会

日時：10 月 3 日 (土) 15:00~17:30

場所：京都精華大学ポピュラーカルチャー学部 友愛館 Y-005

報告者：

白石知雄 (神戸女学院大学)

安田昌弘 (京都精華大学)

1. (研究発表) 白石知雄「大栗裕の採譜の実際 - 『大栗文庫』所蔵資料の 2015 年度再調査報告を中心に」

白石氏の発表は「大栗文庫」で新たに見つかった大栗裕の代表曲『交響管弦楽のための組曲《雲水讃》』(1961) のスケッチを通して、この曲の文化的背景や「大栗文庫」の資料的価値を捉え直すものである。

大栗は関西を拠点に活動していた作曲家で、吹奏楽や管弦楽、オペラ、さらには放送局の劇伴音楽や童謡など幅広いジャンルを手掛けてきた。彼の死後、朝比奈隆の呼びかけで1982年11月、大阪音楽大学附属図書館に「大栗文庫」が開設するに至った。「大栗文庫」には、それまで点在していた直筆譜を含む楽譜の他に、プログラムや作品のスケッチ等の様々な紙媒体の資料、カセットテープなどの録音資料などがあり、《雲水讃》のスケッチはそうした資料の一つである。

大栗はこの《雲水讃》を作曲するにあたり、京都の吉祥院における六斎念仏と西国巡礼御詠歌を取材している。その際に録音したテープが残っているが、発表者自身の調査により、その録音は実際の六斎念仏の冒頭部分が切れているとわかった。《雲水讃》のスケッチの中には、大栗がその途中から始まった録音を忠実に「採譜」している譜面が残されていることから、白石氏は、彼がこの録音以外の典拠を使わずに《雲水讃》を作曲していることを指摘し、その上で、このスケッチを典型的な西洋音楽の作曲家によるアレンジの一過程を窺い知ることのできる「採譜」の例として説明した。

また、六斎念仏は本来いくつかの舞踏劇の演目を含んでいることから、その舞踏の要素と《雲水讃》との関連性にも話が及んだ。昭和30年代のマンボ・ブームに乗じて吉祥院のパフォーマンスは「マンボ六斎」と呼ばれ、《雲水讃》はちょうどその頃作られている。発表者によると、当時の大栗のマンボに対する強い関心を示す痕跡が残っており、それはしばしば「大阪のバルトーク」と称された彼の純粋な西洋音楽作曲家のイメージから外れる一面を示すものでもあるという。昭和という時代の文脈にさらした時、彼の作曲家としての位置付けや《雲水讃》の解釈は新たな広がりをもつ。

この綿密な資料研究の中間報告を受けて、フロアからは様々な視点から質問がなされた。中でも興味深かったのは、六斎念仏の「採譜」に関する質問である。質問者は、大栗が採譜の段階でリズムや拍子の取り方が明確である点に注目し、完成した曲の中でそれらがそのまま生かされていることから、この「採譜」作業は節を聞き取るというよりも、自身の作曲する際の身体感覚でスケッチをとっているのではないかと指摘した。またその質問から、この大栗のスケッチに対して「採譜」という言葉がそもそも適切であるのか、という議論に発展した。これに対して、白石氏は大栗が職人的気質をもった筆の早い作曲家であったことを考えると、彼の「採譜」作業はもっと雑駁な、「移し替える」という意味合いではないかと答えた。

大栗は約30年にわたる作曲活動の中で様々なジャンルを横断し、早筆ゆえに多くの作品を残しており、彼の研究は今後多岐にわたる視点を要するだろう。そういう点を考えると、白石氏の発表は大栗裕の研究をさらに深めるとともに、昭和の音楽史研究の発展にも寄与するものであった。

(肥山紗智子：神戸大学大学院 日本音楽学会会員)

## 2. (話題提供) 安田昌弘「音楽と場所」

報告者である安田昌弘氏によると、音楽は特定の場所と関連づけられ、結びつけられてしばしば語られる。ただし、あるものは音楽的要素によって説明され、あるものは社会的／文化的背景によって説明されると

いったようにその結びつきは一樣ではなく、理論的には曖昧な場合も多い。本報告では、こうした音楽と場所の結びつきへの学術的なアプローチの整理および理論化が試みられた。

具体的には、それらの代表的なものとして、以下の3つの論文および著作が俎上に載せられた。

ひとつめはニューオリンズのセカンドラインビートに関する Doleac, B. (2013)の論文であり、音楽的要素と場所の結びつきに関するものである。セカンドラインとはニューオリンズで葬儀の帰り道におこなわれるブラスバンドを伴った行進で、そのリズム(バスドラムが1拍目と3拍目と偶数小節の4拍目、スネア2拍目と4拍目を基準に即興的に演奏される)はセカンドラインリズムやセカンドラインビートと呼ばれる。Doleac はダウソフトを使ってリズムを計測することによって、八分音符が不均等(長さが違う)であることを明らかにし、これをニューオリンズのセカンドラインリズムの決定的な特徴だとする。

ふたつめは、20世紀末にNYのサウスブロンクス街のインフラストラクチャーがどのようにヒップホップ文化に流用されていったかを描いた T・ローズ(1994=2009)の著作である。ローズによると、ヒップホップは荒廃するインフラストラクチャーを自分たちのやり方で流用していくことで発展、つまり、グラフィティやストリートダンス、路上でのパーティ(DJ)やラップによって、まちの使用法が書き換えられたのだと指摘する。これは音楽文化を環境要因によって説明するものである。

みつめは Cohen, S. (2010)によるビートルズで有名なクラブ、キャバーンクラブとリバプールサウンドの関係に関する論文である。60年代にリバプールを中心に活動した3つのグループの演奏場所をマッピングしたCohenによると、同クラブはしばしば賛美されロマンチックに語られるが、実はさまざまなグループの活動の結節点に過ぎない。このことから、Cohenは人びとの心証や感情や記憶にも注目する必要があることを促す。

以上をふまえたうえで、Harvey, D. (2006)の“space”に関する考察(ルフェーブルを下敷きにした3×3のマトリクス)を紹介することで、報告は締

めくられた。

なお本報告は、2015年12月6日におこなわれる日本ポピュラー音楽学会第27回大会シンポジウム「音楽と場所- 京都から日本のポピュラー音楽文化の今を展望する」の前哨戦または予習と位置づけられるものである。

今世紀に入ったところから、日本各地で音楽祭やフェスティバルが増加しており、地名を掲げているものも少なくない。またインターネットやデジタル機器の発展により地方の音楽シーンが注目されることも増えつつある。こうしたことを考えれば、音楽と場所に関する議論は、より重要性を増すのではないだろうか。経験的な研究をとりまとめて、理論的な枠組のなかで整理されていくことの必要性を感じる報告であった。

(永井純一 神戸山手大学)

◆information◆

**理事会・委員会活動報告**

■理事会

2015年第3回理事会(持ち回り)

(10月14日議題送付/10月28日回答締切)

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

**事務局より**

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol.1~Vol.11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されています。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jasp>

[mpms1997/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jasp/mpms1997/-char/ja/))

そのため、事務局に所在するVol.11までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております(ただし送料はご負担いただきます)。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方(非学会員の方でも結構です)は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていないVol.12以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1000字から3000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは86号(2010年11月発行)より学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL:<http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

2013年より、8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除した

ものを、他の号と同様に PDF により掲載しております。

次号 (107 号) は 2016 年 2 月発行予定です。原稿締切は 2016 年 1 月 20 日とします。また次々号 (108 号) は 2016 年 5 月発行予定です。原稿締切は 2016 年 4 月 20 日とします。

2011 年より、ニューズレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニューズレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

### 3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。

ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

#### JASPM NEWSLETTER 第 106 号

(vol. 27 no.4)

2015 年 12 月 23 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 栗谷佳司・井手口彰典・大山昌彦・小川博司・東谷護・長尾洋子・伏木香織・輪島裕介

学会事務局：

〒565-8532

大阪府豊中市待兼山町 1 - 5

大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室

輪島裕介研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士・大山昌彦